

「仕事ができる社員、できない社員」という本からです
「なぜ、なぜ、なぜ」と考える人 論理的に仕事をするということは、こういうこと

「なぜ」を突き詰めていくと、論理的に考えられるようになります。また、「なぜ」と質問を発し、物事を分析することによって適切な判断を下すことができます。仕事ができる社員は、どんな仕事においても「なぜ」という思考のベースを持っています。つまり、ロジックで考えて物事を組み立てるクセがついているのです。日本人は一般的に、どうも感情で物事を決めようとする側面が強いようです。たとえば、「時計がほしい」と思ったときでも、「デザインが好きだから」という感覚で選んでしまうのです。感情に引っ張られすぎると、その他諸々のことを見逃してしまうので、買った後で「使い勝手が悪い」「買い物に失敗した」と後悔することも珍しくありません。

仕事でいえば、会社でトラブルが起きたときなどは特に、論理的に考えることの重要性が浮き彫りになります。たとえば、部下が何かトラブルを起こしたとします。そのとき、ただ感情的に怒鳴りつけるのが無意味なのはいうまでもないことです。さらに、問題を起こした社員に対して減給やボーナスカットなど罰則を与えたところで、前向きで最善の「根本的な解決」にはなりません。反省をうながすため、と見る向きもあるかもしれませんが、けれど、失敗した当人はたいいの場合、深く深く反省しているものです。社員自身がどんな失敗をしたのかを明白にし、深く反省して、申し訳ありませんと頭を下げているのであれば、まず着手すべきはその失敗によるトラブルに対処するための「緊急対策」です。要は、トラブルがさらに拡大しないように、「何ができるのか」を徹底的に見つけていくのです。「なぜ、なぜ、なぜ」で論理的に考えていけば、必ず解決策は見えてきます。緊急対策がうまくいったら、次は、「再発防止策」の検討です。なぜミスが起こったのか、なぜトラブルにまで拡大したのか、「なぜ」を突き詰めて、それを繰り返さないために平素からやるべきことを見つけていくのです。

稲盛和夫氏は、「人間とは弱いものである」といっています。人間は性根の弱い生き物であるという「性弱説」という考え方です。人間というのは、床に札束が落ちているのを見つけたら、持って行ってしまいうらい「心が弱い」のです。あるいは、一万円札が山ほど机の上に転がっていたら、一枚くらい盗ってもわからないだろうとポケットに入れてしまうものなのです。では、その一万円札をポケットに入れた人が悪いのでしょうか。違います。もともと人間は「性弱」なのですから、むしろ、一万円札が床に落ちていたり、そこらじゅうに雑然と置いてあったりすることに問題があって、その点を深く反省すべきなのだといわれているわけです。私もまさにその通りだと思います。失敗した人をつかまえて罰則を与えることよりもっと重要なことは、「緊急対策」と「再発防止策」を徹底的に検討し、つくり上げることではないでしょうか。

私がこの本で紹介しているロジックは、何十年も会社勤めをする中で、実践を通して磨き上げたものです。仕事の中で「なぜ」という自問を繰り返し、さらには部下に対して「なぜ」と追及し、逆に部下のほうから「なぜ」を突きつけられた結果として、練り上げられたものです。ですから、私は仕事の仕方においてブレるということはありません。いつの間にか、私の中に一本筋の通ったルールが出来上がっていて、どんなに思考の大風呂敷を広げても、必ずそこに戻ってきます。何かを考えるとき、思考を始める入口は違って、必ず同じ出口に行き着きます。あなたも、「なぜ、なぜ、なぜ」と常に繰り返し考えてください。その結果、決してブレることのない、あなたなりの「考え方の軸」をつくることができたら、それは、仕事ができる人になるための大きな糧となるはずです。

「なぜ、なぜ、なぜ」と常に繰り返し考えてください。その結果、どうなると言っていますか？

()